

技術展示コーナー，市民向け行事，見学会，交流会の報告

第 53 回地盤工学研究発表会（高松大会）実行委員会

1. 技術展示コーナー

1.1 はじめに

第 53 回地盤工学研究発表会（高松大会）は，平成 30 年 7 月 24 日～26 日の 3 日間にわたり，サンポートホール高松及び香川県民ホール（レクザムホール）において実施しました（口絵写真-4, 5, <http://u0u1.net/EDoR>）。両会場とも，高松港に面しており，青い海と緑の島が遠望でき，海風を感じることができる場所でした。

技術展示は，サンポートホール高松 1 階の隣接する 3 つのスペース（展示場，市民ギャラリー，コミュニケーションプラザ）にて開催しました（口絵写真-6～8）。今回の技術展示には 56 ブース（59 団体）の出展を頂き，技術展示ブースでは，材料，調査・試験法，解析法，設計・施工法等の地盤工学に係る優れた技術が広く紹介されました。

技術展示開会式での小竹副実行委員長の挨拶を皮切りに，その後，多くの方にご来場頂き，各ブースで熱心な意見や情報の交換が行われました。また初日終了後，出展者及び来場者への歓迎式典（ウェルカムパーティ）を展示場内で行いました（口絵写真-9）。大谷地盤工学会会長の挨拶，長谷川実行委員会委員長の乾杯により始まった歓迎式典では，日中の暑さにより乾いた喉をうるおすビールとともに，おつまみの讃岐名物「しょうゆ豆」が好評でした。昨年度の名古屋大会にならって実施した歓迎式典は，3 日間にわたる技術展示への出展社相互の親睦を深めるきっかけになりました。

技術展示コーナーへの来場者数は，3 日間で延べ約 3 500 名（推計）と多くの方にお越し頂きました。会場となったサンポートホール高松 1 階は，研究発表会参加者だけでなく，一般市民の方にも利便性の高い場所であり，昼休み休憩などには一般市民の方の来場も多く見られました。

1.2 技術展示コーナーでの工夫と試み

前年度の名古屋大会では過去最大の 73 ブースを記録しており，高松大会では果たして何ブースのお申し込みを頂けるかが当初からの心配事でした。さらに，会場となるサンポートホール高松 1 階の展示場は面積の狭さから 40 ブースしか確保できないという悪条件も重なりました。しかし，出展申し込み数は申込締め切り期日前の早々に予定数に達し，急遽，新たに展示スペースを確保した次第です。できるだけ多くの出展希望をかなえるべく，展示場に隣接する市民ギャラリーやコミュニケーシ

ョンプラザを展示スペースとして利用するとともに，通路などのオープンスペースもブーススペースとして利用しました。それでもブーススペースが足りずに，せっかくのお申し込みをお断りさせて頂いた団体を生じさせてしまいました。

技術展示コーナー内のブース割りにおいては実行委員会にご一任頂き，実行委員会では業種や地域性を考慮してブース割を決定しました。しかし，通路部のブースでは通過人数は多いものの滞在時間が短くなるなどのご意見を頂いており，会場設営における反省点となりました。

高松大会の技術展示では，来場者に多くのブースを回って頂くための工夫として，技術展示コーナー内の 3 箇所に設けたスタンプを集める「スタンプラリー」を実施しました。スタンプラリーを終えた方には，特典として隣接する特設うどん店でさぬき名物の「ひやぶっかけうどん」を 100 円で提供する企画です。この企画は計画段階では好評でしたが，スタンプを 3 つ押してから展示場奥のうどんチケットコーナーで 100 円のうどんチケットに交換し（口絵写真-10），それを持って特設うどん店で食するというものでした。このように，手間が意外とかかることで，さぬきうどんの「早くておいしい」の早くに反する企画であったためか，初日に食されたうどん玉数は低調でした。2 日目及び 3 日目は，研究発表会会場の特設うどんコーナーを来場者にアピールするとともに，スタンプラリーなしでもうどん 1 杯 100 円とすることで，結果的にはうどん店閉店時間の 14:00 までには用意したうどん玉をほぼ食して頂きました（口絵写真-11）。さて，みなさん，提供した「ひやぶっかけうどん」の味はいかがでしたでしょうか？

そのほか，技術展示コーナーでは，特別会員 PR，ドリンク無料提供，G-CPD 登録の各種コーナーを併設しました。例年の技術展示コーナーでは会場屋内に設けられている休憩・商談コーナーを，高松大会ではエアコンの効かない会場屋外に設けざるを得ませんでした。少しでも暑さをしのぐためにミスト送風機を設置しましたが，休憩・商談コーナーのご利用者にはご不便をおかけいたしました。

1.3 おわりに

出展者アンケートによると，おおむね会場環境に満足頂けたようですが，会場の狭さや奥まで来場者が入ってこない等のご意見も一方で頂きました。今回の課題を整理して，次期開催地に引き継ぎたいと思います。

最後になりましたが、出展者及び来場者の方々や、出展者募集に際してご協力頂いた各種団体・機関に、厚くお礼を申し上げます。

2. 見学会

2.1 はじめに

高松大会 2 日目の 7 月 25 日 (水) に、1 日コースと半日コースの 2 つの見学会を用意しました。コース選定においては、地盤工学に係わる場所でありながら、日ごろは公共交通機関を使っても、なかなか行きづらいところを念頭に企画を練りました。

2.2 1 日コース (やむなく中止)

見学会 1 日コースは、(1)新猪ノ鼻トンネル工事現場、(2)こんぴらさん (金毘羅宮)、(3)銭形砂絵「寛永通宝」を回るコースです。この 1 日コースの参加申込者数は、開催 1 週間前の時点でもごく少数であったために、参加申込者のご了解を頂き、やむなく中止としました。

見学会 1 日コースは実施しなかったわけですが、今後機会があれば是非とも訪れて頂きたい、以下に簡単に紹介いたします。

(1)新猪ノ鼻トンネル工事現場

四国の主要幹線道路である国道 32 号線の、香川県三豊市～徳島県三好市区間は、讃岐山脈を横断する猪ノ鼻峠を越えるもので、急坂や急カーブ、冬期積雪など、交通の難所となっています。これらを解消するため、延長 8.4km の「一般国道 32 号猪ノ鼻道路」が建設されています。本トンネル工事では、CIM 活用や坑内見える化システムの導入など、働き方改革推進現場として、様々な取り組みがなされています。

(2)こんぴらさん (金毘羅宮)

こんぴらさんは、古来より海の神様、五穀豊穡・大漁祈願・商売繁盛など広範な神様として信仰を集めています。参道口から御本宮までは 785 段、奥社までは 1 368 段の石段が続きます。御本宮は花崗岩の緩斜面上にありますが、奥社は讃岐岩質安山岩からなる急斜面上にあるため、本社から奥社まではさらに長い石段を登ります。これら宮の立地と地形地質との関係は、NHK の人気番組ブラタモリで紹介され、香川大学創造工学部長の長谷川修一教授により分かりやすい解説がなされました。

(3)銭形砂絵「寛永通宝」

香川県観音寺市にある寛永通宝を模した巨大な銭形砂絵で、縦 122m、横 90m、周囲 345m の楕円形をなし、琴弾公園山頂の展望台からみると真円に見えます。寛永 10 年 (1633 年) に藩主、生駒高俊公を歓迎するために一夜にして作られたと言われており、この砂絵を見れば健康で長生きし、お金に不自由しないと伝えられています。

2.3 半日コース

見学会半日コースは、JR 高松駅バス乗り場を 13:00 に出発後、マイクロバスで、(1)庵治・牟礼石の民俗資料館と、(2)屋島 (山頂、屋島の城、屋島寺) の 2 箇所

を見学後、JR 高松駅に 16:30 に到着するスケジュールです。参加者 10 名＋スタッフ 2 名の計 12 名でアットホームな雰囲気のもとでの見学会でした。

(1)庵治・牟礼石の民俗資料館

世界的銘石「庵治石」の産地である牟礼町の石工技術を伝える庵治・牟礼石の民俗資料館 (口絵写真-12) では、後世に継承することをメインテーマに、各工程での様々な石工用具が展示されているほか、手作業での石の切り出し、運搬、加工の各風景がジオラマで再現されていました。

参加者の間では、石工技術がなぜこの地域で発展してきたのかの議論が生まれ、経済・交通といった社会条件のほか、花崗岩の産状やその鉱物組成という、銘石となるべく地質的素因にまで踏み込んだ考察がなされました。

(2)屋島

屋島は、山頂部の平坦面が急崖で囲まれたメサ地形として、昭和 9 年に国の天然記念物に指定されています。また、屋島の麓は源平の古戦場 (1185 年) としても有名です。屋島山頂には古代の朝鮮式山城である屋嶋城 (やしまのき) の石垣が近年に復元されています。山頂の平坦面の南嶺部には四国八十八箇所 84 番札所の「屋島寺」があります (口絵写真-13)。

参加者らは、山頂から讃岐平野と瀬戸内海の展望を楽しみ、瀬戸内火山岩類に特徴的な円錐状山地の景観と、それらが一連の地形配置として、瀬戸内海の多島美につながる様子を実感していました (口絵写真-14, 15)。

(3)丹下健三の建造物の見学

建築の先生が参加されていたことから、スタッフの発案で帰路のルート上にあった旧香川県立体育館 (閉鎖中) に立ち寄ることにしました。本施設は、国立代々木屋内総合競技場の雛形にもなったと言われる丹下健三の伝説的な建築物です。急なお願いにもかかわらず、先生にはこの建築物が持つ歴史や重要性についてご説明頂きました。このような貴重な建築遺産を後世まで伝え残すことが、我々の世代の重要な役割であると改めて認識しました。

2.4 おわりに

今年は特に猛暑著しく、半日コースさえも参加者が集まらないのでは? との不安がよぎりましたが、結果、10 名もの皆様にご参加頂き、予想外の喜びに変わりました。反面、見学会は一般市民向けとしていましたが、一般市民の参加はゼロでした。また、1 日コース見学会が参加者が少なかったために中止となったことも、反省点として残りました。コース選定や募集アナウンス方法など、今回の課題を次期開催地に引き継ぎたいと思います。

3. 市民向け行事

3.1 はじめに

今回の研究発表会のテーマ「地域の安全と文化をささえる地盤工学」のもと、技術展示、特別会員 PR コーナ

一、特別セッション、サロン・土・カフェ W、見学会、市民向け行事を、一般開放いたしました。市民向け行事としては、地盤品質判定士会のご協力を得て、住宅地盤講演会と受託地盤相談会を実施いたしました。

3.2 住宅地盤講演会

大会2日目の25日(水)13:30~15:50にサンポートホール高松5階の第5会場において、「知りたい!宅地の安心、安全 講演会~住宅地盤に潜むリスク」を開催しました(口絵写真-16)。講演会は、高松市を中心とする香川県の地盤情報や、安全な宅地地盤を見分けるために必要な基本的な知識を伝えるとともに、自宅周辺の地盤の成り立ちや問題点などを知って頂き、日頃の防災に役立てて頂こうと開催いたしました。参加者数は50名と多くの参加を頂きました。一般市民の方の参加は約半数でした。

講演は4名の講師により行われ、地盤品質判定士制度の説明の後、地図から自宅の災害安全性を見分けるコツ、香川県の地盤と災害、地盤に起因する住宅のトラブルなど、住宅地盤に係る講演内容でした。

参加者に関するアンケート結果によると、参加者の方々は宅地地盤の地盤調査の方法や妥当性、宅地の造成方法、宅地の事故に関する裁判事例などに興味を持ってもらえるようでした。また、アンケートによる意見では、非常に興味のある内容であったので、我々一般市民への広報活動をより多く行い情報提供を行って欲しいという意見や、日頃からなんとなく感じていた疑問が講演内容により明確に実感できたので子供の世代に伝えていきたい、等の意見が寄せられました。

3.3 住宅地盤相談会

大会開催期間中の3日間を通してサンポートホール高松5階の会場において、「地盤品質判定士による住宅地盤相談会」を開催しました(口絵写真-17)。相談会では、造成宅地地盤の専門家である地盤品質判定士が、相談者から住宅地盤に関する様々な疑問・不安な点をお伺いし、解決のアドバイスをしようとするものです。

一般市民からの相談は2名あり、自宅周辺の液状化の危険性や、地域の自主防災に係る問題点や留意点などの相談が寄せられました。

相談員は地元香川だけでなく、他地区で活躍する地盤品質判定士の混成チームでした。相談者の中には、現住所は高松市内だけでも、実家は昨年7月の九州豪雨災害で被害を受けた福岡県朝倉市という方がおられました。混成チームであったために詳細なアドバイスができました。

3.4 おわりに

高松大会の後援を、国土交通省四国地方整備局、香川県、高松市から頂きました。また、香川県と高松市の広報担当課を通してプレスリリースをお願いできました。そのおかげで、多くの一般市民の姿が会場内で見受けられました。この場を借りてお礼を申し上げます。

地盤品質判定士関連の二つの市民向け行事について

は、高松市のご協力のもと高松市内の全てのコミュニティセンターに案内チラシの配布を行いました。また、案内チラシを自治会に回覧して頂いたコミュニティセンターもありました。このように多くの参加者を募る努力を行いましたが、特に相談会への参加者は少ない結果となりました。これは、香川県自体が比較的的自然災害が少ないことや、地域の地盤災害特性までは気になるけれども、自宅の地盤の安全性を意識させるまでにはまだまだであり、今後も継続して地盤品質判定士の知名度を向上させる活動を行っていく必要があると言えます。

4. 交流会

4.1 はじめに

高松大会2日目に、大会メイン会場であるサンポートホール高松に隣接するJRホテルクレメント高松の飛天の間において、交流会が開催されました。

7月に発生した西日本豪雨災害の救援・復旧作業が各地で行われているさなかでの高松大会交流会の開催となり、果たして何人の方に交流会にご参加頂けるか予想の付かない中で準備を進めました。実行委員会では独自の努力を行いました。交流会への事前申込者数251名と目標人数350名に遠く及ばず、実行委員会では当日の申し込みに期待するしかありませんでした。しかし、大会期間中の当日申し込みが順調に増え、中止した特別講演会の時間帯を利用した緊急災害調査報告セッションの開催なども、当日申し込み者数の増加につながりました。

交流会の当日参加申し込み者数の一般195名、学生13名を、事前申し込み者数に加えると計459名となり、盛大な交流会を開催することができました。交流会にご参加頂いた多くの方々に、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

4.2 次第

交流会は、開始予定時間の19:00に司会より開宴が告げられました。長谷川実行委員長の参加者へのお礼を込めた挨拶の後(口絵写真-18)、大谷会長に主催者代表としてご挨拶を頂きました。大谷会長からは、来賓及び関係者への謝意とともに、地盤工学会の社会に果たす役割や、学会員への今後の期待等が述べられました(口絵写真-19)。

来賓として、国土交通省四国地方整備局企画部長の野崎智文様、香川県副知事の西原義一様、高松市副市長の加藤昭彦様をお招きし、それぞれご祝辞を頂きました。野崎様は災害対応の陣頭指揮のための防災服姿であり、ご祝辞では特に防災・減災への地盤工学者が果たす役割の大きさを熱く述べて頂きました。西原様並びに加藤様には、香川県若しくは高松市の災害履歴を踏まえた上で、当地は決して災害が少ない地盤環境にはなく、地盤工学研究推進への大きな期待が寄せられました(口絵写真-20~22)。

中野調査・研究部長に乾杯の発声を頂き祝宴が始まり

ました（口絵写真－23, 24）。祝宴での料理と飲み物はいかがだったでしょうか。実行委員会では、高松らしい交流会にすることを念頭に、地元郷土色あふれる食事メニューや、地元で人気の高い日本酒をご用意いたしました（口絵写真－25, 26）。交流会の当日申し込み者数が急増したことで、急遽、料理数を増加する対応を取りました。しかし、宴会スペースを広くすることはかなわず、参加者には窮屈感のあるなかでの交流となってしまったことは、実行委員会として申し訳なく思っています。

交流会も終盤となり、次期開催地関東支部を代表して桑野実行委員長から、次期の第54回地盤工学研究発表会（大宮大会）のPRを兼ねたご挨拶を頂きました（口絵写真－27）。最後に、大野実行副委員長（四国支部長）による閉会の挨拶で交流会を終えました。

4.3 おわりに

地方都市である四国・高松での開催であるため、交流会への参加者は少ないのではとの心配がありました。高松大会実行委員会では多くの方に交流会にご参加頂けるよう、企画段階で様々な検討を行いました。研究会発表会会場が海に近いことから、船をチャーターした海上での交流会実施や、交流会料理をいかにご満足頂けるかなどです。スケジュールや予算上の難しさから、船上での交流会実施は実現できませんでしたが、次回は高松らしい交流会を是非実現できればと考えています。

最後になりましたが、公務ご多用のなか、交流会にご臨席賜りましたご来賓の皆様、交流会の設営・運営にご協力頂いた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

5. 高松大会開催における関係者へのお礼

高松大会開催にあたり、様々な立場の方々から多大なご支援とご協力を頂きました。

高松大会では準備段階において、①発表者数及び参加者数の減少が心配されること、②研究発表会会場がサンポートホール高松とレクザムホール（香川県県民ホール）に分かれるという分散会場になってしまうこと、③技術展示コーナーのスペースが狭く必要なブース数が確保できないことが、大きな課題としてありました。これらの課題に対しては、高松大会実行委員会を掌握する調査・研究部会研究発表会委員会からはその都度適切な助言を頂きました。また、本部理事会には、調査・研究部会を通じた実行委員会からの提案をご承認頂くとともに、高松大会の成功に向けた有形無形の多くの応援を頂くことができ、実行委員会の心配は大きく軽減できました。

本部事務局の担当者とは、大会開催が迫るにつれ打ち合わせ内容が多岐にわたり、名前を名乗っただけで担当者につないでもらえるほど、毎日のように電話やメールでやりとりをしました。お世話になりました。

地盤工学会四国支部は、全国の支部の中でも最も会員数及び予算規模の少ない支部です。この四国支部で全国大会を開催するにあたり、四国支部全員出動態勢で実行

委員会（32名）を構成しました。四国四県の大学高専の教員はもとより、各関係機関にも広く協力を頂きました。実行委員会において、国土交通省四国地方整備局、西日本高速道路（株）四国支社及び四国電力（株）土木建築部には、多大なご貢献を頂きました。

（公財）高松観光コンベンション・ビューローには、会場の確保調整や、補助金・助成金の申請補助、プレスリリース調整、観光案内等の配布物の無料提供等、高松大会の準備段階から開催当日まで、様々な場面で温かいご支援を頂きました。

大会ポスター及び大会ホームページの作成では、地元高松の広告会社である四国工業写真（株）に依頼しました。要望した3つのイメージ「海、島、うどん」を実現した大会ポスターは好評を頂きました。大会ホームページは、スマートフォンでの閲覧がスムーズとなるデザインとして頂きました。また頻繁な修正依頼においても、極めて迅速に対応して頂きました。

会場の設営及び運営補助では、（株）セキヤ担当者とは何度も打ち合わせを重ね、会場の制約から生じる様々な問題に対して解決策を見出しながら当日を迎えました。

高松大会開催においてご支援とご協力を頂いたすべての方々にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

（文責：山中 稔）

（原稿受理 2018. 8. 30）